

NHKブラタモリ「室蘭」のその後 山岸宏光¹・松田義章¹・志村一夫²

この報告は、NHKブラタモリ「室蘭」のロケ前の航空機や現地調査、放映後の札幌市、室蘭市での講演会や現地での数回のクルージングなどの経緯をまとめたものである。

NHKブラタモリ「室蘭」(#91)に山岸が出演したのは、1)2017年11月25日であった。この番組放送後は、室蘭市民や元同市民から大きな反響があった。2)2018年2月3日のHRCG開催の「水中火山のはなし」には満席の50名が参加した。3)2018年8月2日「むろらん100年建造物保存活用会」の主催による、マスコミや関係者向けのクルージング(船は室蘭開発局から提供)が開催された。4)2018年10月27日「むろらん100年建造物保存活用会」主催の室蘭市民向けの講演会が開催され、山岸と松田が講演した。山岸の演題は「室蘭絵鞆(えとも)半島の水中火山-地質学が紐解く名勝ピリカノカ之美-」であった。5)2019年8月7日道庁胆振振興局主催によるクルージング「アイヌ語と絵鞆半島の地質」が開催され、参加者は市内の女子高校生8名であった(この船の定員は8名)。この際に使用された松田による紙芝居(図1)は好評であった。6)2019年9月18日には同じ主催者とテーマで、室蘭市の発信力のある女性8名を招待してクルージングが実施された。その後、7)2019年11月16日に、北海道開発局室蘭開発建設部の主催で、参加者が多いため民間の船で実施しようとしたが、折からの強風のため、陸上見学会となり「室蘭八景」を中心にバスで回って、「室蘭ろうそく岩」、トッカリショの前置層や頂置層(三角州などで海に向かって傾斜した堆積物を前置層、その上部にできる水平な地層を頂置層という)、イタンキ浜の鳴き砂などを見学した。そのハイライトは地球岬の溶岩ドームや水冷破碎岩からなる景観である(図2 および3: 山岸ほか, 2019)。

【文献】山岸宏光・畑本雅彦・鎌田光也・志村一夫(2019)地学雑誌128, 941-952。(1. HRCG理事, 2. (株)シン技術コンサル)

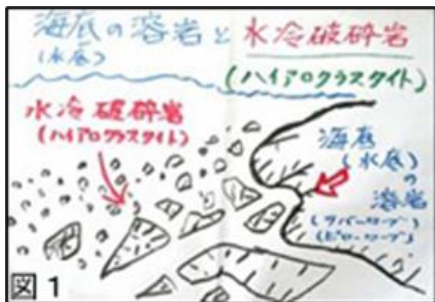


図1 松田によるクルージングの際の説明に使用された紙芝居(水冷破碎岩のでき方)の一枚。



図2 海から見た地球岬。真ん中の溶岩ドームと両側に水冷破碎岩が囲んでいる。いわば「地球岬水中火山」(志村一夫撮影)。

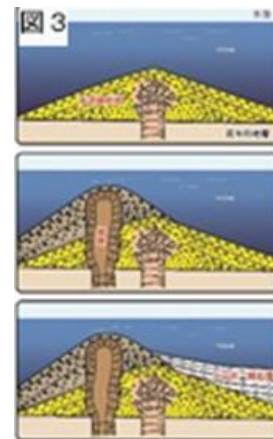


図3 図2の溶岩ドームと水冷破碎岩の形成モデル。

北海道産石材の文化地質学、特に小樽軟石について

松田義章

北海道の近代都市文化の発展に関与した北海道産の石材

近代=明治~大正~昭和初期において、近代建築物用の石材として活用された北海道産の石材として、松田(2011)は以下のものを挙げている。(1)[凝灰岩類]札幌軟石、平岸石、小樽軟石、桃内軟石、忍路石、島松石、登別軟石、登別中硬石、富良野軟石、美瑛軟石、美幌軟石等。(2)[安山岩類]札幌硬石、藤野沢石、穴沢石、小樽石、塩谷石、岩内石、室蘭石、静狩石、函館石、駒ヶ岳石、留萌石、紋別石、網走石、北見鉄平石等。

小樽の商業文化の発展・盛衰と石材の活用及び岩質

小樽市は、北海道の都市としては古い歴史を有し、江戸中期から末期には、ニシン漁で繁栄し漁労文化が育まれた集落であった。この「ニシン文化」には、北前船を介しての本州文化の流入の影響があり、すでに海産物を貯蔵するための石造倉庫の造成という「石材の文化」が、札幌で見られる明治初期の開拓=官制主導の文化に先立って、札幌よりもかなり早くから存在していた。この小樽の石材の文化の発展に寄与したのが、いわゆる「小樽軟石」であった。さらに、明治維新を迎えると小樽港は北海道移民の玄関口となった。それまでの北海道の産物に加え、本州からやってくる人々と彼らが日常的に使用する物資の集積港となり、本州各地からの文化がさらに流入・集積して独自の文化が繁栄した。特に日露戦争後には樺太との交易が活発化し商業文化がさらに発展したこのような経済的な繁栄を反映して多くの石造庫が建造された。この石造倉庫の石材として活用されたのが、「札幌軟石」や「小樽軟石」である。

なお、「札幌軟石」は、新生代第四紀完新世の約4万年前に破局的な噴火をした支笏火山に由来する火砕流堆

積物の一部である。陸成の溶結凝灰岩であり、岩相や岩質は単調である。これに対して、「小樽軟石」は主に新第三紀後期中新世～鮮新世（約12Ma～5Ma）の水中火山噴出物および火山性二次堆積岩であり、火山礫凝灰岩、軽石凝灰岩、砂質凝灰岩～凝灰岩質砂岩等である。岩相や岩質は多様性を有する(Matsuda & Yamagishi, 1997)。

【文献】松田義章（2011）北海道大学総合博物館。28-30。Matsuda & Yamagishi (1997) Geol. Surv. Hokkaido. 68, 103-111. (HRCG理事, 北海道教育大非常勤講師)

新入会員の声

木村則子

30年程趣味で縄文土器、土偶を作り、縄文人の暮らしぶりを探っております。人間の暮らしを探るには水の在りかが重要で、自ずと地形に注目する事になり、地形の成り立ちにも関心が向きます。又、縄文人の様に実際に山野を歩いて得られる、見えるもの、聞こえるもの、触れるもの、味わってみるものも貴重な情報で、山登りは必須です。例えば、縄文時代の石器の出ている大雪白雲岳から高根ヶ原を眺めると、縄文の人々が見ていた風景と同じ景色を目にでき彼らの感性に少しは重なれるような気になります。

縄文の暮らしぶりを探っていくと人間の作ったルールが見えてきますが、そのルールが従わざるを得ない自然の摂理への理解を深めたいと思い今回入会致しました。自然の摂理を解明しようとされている方々のお話を伺えるのを楽しみにしております。

写真は、私の作った、およそ3千年前縄文晩期の中空土偶です。私の出身地室蘭出土で、高さは18.4cm。勝手に「蘭子ちゃん」と呼んでいます。3千年前室蘭にいた人々の感性が垣間見えてきませんか。



お知らせ：本通信は以下のURLにも掲載されています
<http://www.hrcg.jp/notice.html>

理事長から会員の皆さんへ：前田仁一郎

HRCG通信第2号の発行から3ヶ月がたちました。皆さま、いかがお過ごしでしょうか。依然として新型コロナウイルスの感染が止まることも無く、私たちも公開事業を実施できない状況が続いています。この先も不透明ですが、状況を見ながら会員限定の行事を企画していきます。7/3にはzoomを利用したオンライン開催の第16回研究セミナーを予定していますし、やはりこの夏の間には会員限定の野外巡検・野外観察会を検討中です。後者は最終的には取り止めになるかもしれませんが、実施することになれば積極的にご参加ください。またこの間、新しく入会された方が3名いらっしゃることをご報告しておきます。

さて、4/25にオンラインとリアルを併用して通常総会を開催し、引き続き理事長を務めさせていただくことになりました。宜しくお願いたします。皆さま、お元気で。

活動記録

5月13日（木）

2021年度「古俱知安湖」調査

この調査はHRCGの行事ではありませんが、ニセコ在住の方も含む4名が参加し、支笏火砕流堆積物の再堆積相や縞状粘土、厚さ約2mの泥炭などの地質露頭を観察し、試料採取を行いました。

HRCGメンバーによる様々な野外調査があると思われまます。公式行事として取り組むことも大切ですが、情報交換をしながら、調査参加の機会を会員に提供することもHRCGの活動の一つではないでしょうか。

会員紹介・会員短信

2019年10月から個人事業主として建設コンサルタントの仕事に従事しています。現場の移動中、ラジオから流れていた“Erik Satie”の「ジムノペディ」に感動して以来、“Satie”のピアノ全集CDを購入して在宅時は毎日聴いています。



理事
岡村 聡

HRCGの幹事としては足を引っ張る存在ですが、これまで培ってきた地質学の知識が社会の役に立つよう心掛けています。札幌市民の山「三角山」を、マグマの成り立ちから究めたいと格闘中です。



理事
川村 信人

先日、某研究会で講演をしてきました。研究会の名称から聴衆に地質屋はあまりいないものと思ひ込み、勝手な話を準備し講演会場に...ところが、見た顔の先輩地質専門家ばかりで、用意した話の半分を自粛。

編集後記

今回の通信から、担当者が持ち回りで編集作業を行うことになりました。寄稿くださった方には、字数制限で何度も書き直しをお願いするなど、不手際でご迷惑をおかけしました。次回からはスムーズに編集できるよう、計画的に原稿依頼を行うよう努力しますので、原稿依頼に際しては、ご協力をお願いします。また、通信の紙面改善のため、忌憚のないご意見をお寄せ下さい。(岡村)